

## カール・ビューラー「心理學の危機」

大 脇 義 一

Kantstudien の第三十一卷 (1926) に表題の如き論説を寄せた Karl Bühler は更にその論旨を敷衍し昨年單行本として是を公にした。心理學の現状を洞察してその眼光の透徹せる、その批判の嚴正なる近頃出色の文字として推すべきものかと思はれる。本文菊版二百十二頁、こゝにその大綱を述べることにする。

### (一) 心理學の現状

今日のやうに多くの心理學が、同時に並存して居ることは是までに無いことである。迅速に提出されて未だよく消化されてゐない新しい思想、新しい萌芽及び研究の可能性の驚くべき豊産は現今の心理學に危機とも覺しき状態を誘起してゐる。

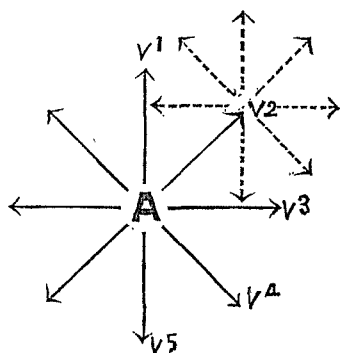
けれども若しそれらにして吾々を欺くことなくば、是は心理學の破滅の危機には非ずして、寧ろ建設の危機である。萬一それらの間に提携が企てられ得るならば吾々は將來、大いなるものを期待することが出来るであらう。危機に臨めるは獨り心理學の現状ばかりではない。他の精神科學に於ても、生物學に於ても亦たそうである。彼等は必ずや心理學の原理論及び方法論に大なる關心を持つであらう。

そこで著者は先づ心理學の現状を特徴づける主要なる潮流として一八九〇年頃の印象主義と古典的聯心合理學、思考心理學と精神分析學、行動主義と精神科學的心理學の六つを擧げた。

吾々心理學の危機の歴史を述べやうとするには一八九〇年頃の狀態から筆を起すのが適當である。といふのは此の時分には心理學の中に多少共通なプログラムと共通なる希望とがあつたからである。一八九〇年は例へば *Zeitschrift für Psychologie* の第一巻が現はれた。編輯に當つたエビングハウスはその周圍に有名な、又はその後有名になつた人々を持つてゐた。生理學者には Helmholtz, Hering, von Kries, Exner 等があり、心理學者には Th. Lipps, G.F. Müller, Stumpf 及び Preyer がある。Ernst Mach は此の中に見えないがその著「Analyse der Empfindungen」は此等一群の人々の精神をば最も明瞭に示してゐる。Elemente なる概念が物理學的の考から精神生活の中へ卽坐に持ち込まれたのは Mach あるのみである。丁度その頃藝術をば、而て心理學者の考をも、支配してゐた印象主義の精神に、マツハほど鮮かに、認識

論的に基礎づけられた表現を興へたものはなかつた。精神生活の原本的な内容はマツハによれば感官所與の内に即ち色、音、香などの内に含まれて居る。是が吾々に直接與へられたものであつて、又、直接所與として、物理學と心理學、自然科學と精神科學の何れにも共通なる出發點であつた。今日、要素心理學とか Sensualismus とか、精神生活の原子論的見方などいふ言葉を口にして新しい心理學を主張せむが爲に古い思想の特性を擧げる人等にとつてはマツハの「Analyse der Empfindungen」ほど都合のよい書はなかつた。

一八九〇頃は、また觀念聯合の事がらが廣く正當なる權利を認められてゐた。聯合作用の實驗的研究は八〇年代の始めにもあつたが一八八五年エビングハウスの記憶研究が出てから始めて心理學の主要なる研究方面の一つとなつた。ところが聯合說の一元論は正當でなかつた。それと同様に新



しい一元論なる形態思想及び意味元理も亦た同じく正當ではないのである。それは後で述べるとして古い聯合心理學によれば吾々の精神現象、就中表象の活動はゼルトツの語を用ふれば diffuse な再生作用の一組織であるとせられる。例へば自分が A なる語を聞けば過去の經驗に於て A と結びついて意識されたことのある凡ての對象の表象  $V^1 V^2 V^3 \dots$  が再起せむとする傾向が現はれる。どころ

が  $V^1 V^2 \dots$  の各表象はまた夫々自身身一個の輻射的聯合の體系を形造てゐる(圖參照)かくして一つの刺戟語から起つた聯合傾向は凡てのあらゆる方向へ進ま

んどし分散せんとする。そうであるから斯かる聯合

合心理學の描かんとする精神現象は diffuse な再生作用の一組織である。表象經過の方向を決定するものは最も強き聯合、即ち聯合の強度あるのみである。この古い聯合説は心的事象を極端に、分散的なるものと考へたのであるがその正反對に極端に決定的なるものと考へたのが精神分析である。求心性の過度、意味の過度 *Ubersinn* 及び *Tiefsinn* である。その何れも致命的なることに於ては變りはない。

さて丁度第二十世紀に入つたばかりの頃、恰も時を同ふして獨逸心理學に古い聯合説を排除する二つの運動が始まつた。その一つは思考心理學であり、他はフロイドの精神分析である。ジュルツブルグのキュルペの周圍の若い心理學者達は實驗的研究をば思考及び意志の方面にまで擴張した。而てその結果、及び思想經過が獨異のものであるといふこと、特有の法則に従てゐるといふことを見

出した。思想は單なる表象像とは異た何物かである。彼等は吾々の注意を表象像から心的活動、心的作用の方に轉回せしめたのである。この心理學に於ける新しい方向を最初に現出したものはストウンプの「Erscheinung und Psychische Funktionen」及びキユルペの論文（Göttinger gel. Anz. 1907）である。こゝに於て心理學の關心は向きかへられて體験心理學が要求されて來た。古典的の聯合説の單純な圖式はうち破られ、體験の學にとつて新しい水進線が展げて來た。一層深く考へるならば體験の志向は體験の意味に向ひ、目的論の規定にまで進められなければならぬ。ビュローラーによれば思考心理學はこのことを既に早くから意識してゐたのである。してみればかの精神生活の純粹機械論説即ち sinnfrei な學説からの轉回は精神科學的心理學を俟つまでもなく既に二十年前に行はれたのである。

思考心理學と精神分析とはその方法に於て非常に異てゐる。前者は Protokolle に大なる價值を置き體験の事實を慎重に捕捉せむとする。所が後者は全てが情況證據に向ひ多少敏感な探偵法を行ふが唯に方法のみではない原理論に於ても兩者の間には大きい隔りがある。がそれにも拘らず歴史的の發生事情に於ては兩者全く軌を一にしてゐる。即ち何れも聯合心理學に對する不満足から出發したのであつた。フロイドの初期の著作を見ればわかるやうに彼はヘルバルトの表象機械論を採用してその出發點とした。Hemmung, Verdrängung, Verschiebung, Verdrängung などの根本概念は何れも是から出た。けれども彼は聯合心理學に不満足を感じるに至た。而も彼は思考心理學者の如く形式的元理の方向に向はずして、ひたすら實質的元理の方向にのみ走せ、遂に人類の動物的衝動に着目し、其からして Libido の道、轉變由來及び變容

に關する驚くべき學說に到達したのであつた。精神分析に就いては著者は特に最後の一章を費してフロイドの偏局と誇張とを指摘すると共に他方、よくその卓見と功績とを擧げてゐる。

さて思考心理學や精神分析の興起にも拘らず心理學が體驗の學であるといふことには些の動搖も來さなかつた。デカルトやロツク以來心理學は内部知覺、自己觀察によつて近づき得るもの、即ち體驗の學として考へられて來た。デカルトの精神實體もフロイドの無意識もその出發點が體驗にあることに於て變りはない。ところがその出發點が廢棄される時が來た。少くとも唯一の可能なるものとは考へられなくなつた。此處に於て心理學の危機は急性的となつたのである。幸か不幸か吾々は所謂客觀的心理學、正確に言へば心理學の客觀的出發點を無視することは出來なくなつた。行動主義は從來の體驗心理學を推し除けてより科學的

なる學、即ち行動の學、動物や人間の、客觀的に規定し得る舉動様態の學を以て之に代へんとするなるほご是が（ある限界内で而てある假定の下には可能であるといふことは著者の所謂動作發達の三つの範疇に當て、明かに看取されるのである。本能馴致及び知能の客觀的標識は確かに存在する。

而て動物を擬人化して考へることから起る不謹慎な推測や輕卒な解釋に引き込まれずに行動學の概念と確認に純粹に止らねはならぬといふ方法論的要請が成立するのである。けれども之に反して他方では、知覺し得べき身體運動の範圍に於けるかの統一と、かの秩序とを目的及び行爲なる根本契機なしに、即ち目的論的な並列體系なしに認識するといふことは事實的に不可能なることが解るのである。この目的論的なものへの轉回が體驗心理學からと同様に行動主義の懷からも出て來たといふことは決して偶然ではない。二つの背馳する

研究方向の綜合はこの原理の名に於て行はれるに相違ないであらう。仔細に視るならば是はもう既に實際準備されてゐるのである。何となれば心的作業なる根本概念は體驗心理學の範圍内に拘束されて止つてはゐないからである。

人間の爲したあらゆる仕事は是を作した人の個性を幾分か帯びてゐるといふことは人の知る所である。ミイラとピラミッドがエジプト王の永遠への憧れを物語りアクロポリスがギリシヤ精神の調和を告げ、ゴシックの大伽藍とグエテのフアウストが西歐人の特質を語つてゐるといふことが夫々事實であるとするれば、全體として「客觀的精神」の無限の産物をば心理學の研究の出發基點に選ぶといふことの可能なことも事實であるであらう。デイルタイに先だち既にゾントは是を民族心理學に於て企てたのであつた。ゾントの民族心理學は少くともその規模に於て驚くべき作品であり、その理

念に於ては客觀的精神の現はれの詳察なる心理學的解釋であつた。然しゾントの方法は今日では無論不満足である。この點に於てデイルタイは實に驚くべき解釋者であり敏感なる洞察者であつた。彼の行つた如き解釋法が正當にして有利であるとすれば今や心理學にとつて誰でも認めなければならぬ新しい眼界が開かれただけではない。心理學の對象について新しき根本規定が起つたのである。即ち心理學は主觀的精神の學でなければならぬ。人間は道德の國の市民であるとカントは言つたが精神科學的心理學者はこの命題を更に擴張して單に道德といはず多方向 多次元の價値の體系に於てある人間を見るのである。無論そのことを心理學者は決して忘れてゐたのではない。たゞ新しい點は彼等が第一この價値の交錯そのものを心理學の出發點として選んだこと、第二に體驗の内に指示され得る意味連繫が一の宇宙を形造れること即

ち意味の凝聚を以て心理學の原理論的豫想としたことである。

以上述べた如く吾々は行動主義者が昔からの體驗心理學をば投げ去つたのを見た。解釋心理學者は心理學の名稱を一人占めにして他を排斥した。

他方精神物理學者やその他の實驗室の實驗心理學者は「體系詩人」や「思辯家」の聲を聞いても聞かぬ様子をしてゐる。この運命の時を心理學は無爲に過してはならない。凡て學問の進歩には接觸、批判及び解答が必要欠くべからざるものである。この機に臨んで吾々の爲さねばならぬことは心理學の對象に就いての哲學的反省である。果して同一の家族名の三の學があるのか、或は又、同じことをするのに三の仕方があるのか、その他如何なる關係がその間に成り立つのであるか。其に就いては恐らく種々の意見が起り得るであらう。自分は體

驗、行動及び事業の三の關係を考へてみたいのである。それを考へることによつて、吾々の哲學的(論理學的、認識論的)考察からして今日既に最初の仲裁裁判が可能なることを主張したのである。

## (二) 心理學の三様相

心理學は如何にして可能なるか。カントが吾々の位置に立てばそう言ふであらう。吾々は心理學の原理、その特性、その可能なる範圍に就いての哲學的考察を要するのである。即ち吾々がここで試みやうとするのはカントの所謂先驗的演繹論の一種である。先づ自分がかういふ論題を立てる。上述の體驗、行動及び事業の三様相の各は何れも可能である。而て苟くも心理學としてはその一も欠くべからざるものであると。といふのは其等のうち何れを探るも他の二つをば是を補ふものとして學的認識の一のまどまつた體系たるが爲に必要欠くべからざるものである。それら三の何れ

もから夫々固有の、心理學に欠くべからざる職分が發生する。即ち心理學の出發點として第一に體驗、第二の生物の意味ある行動、第三にそれらと客觀的精神の產物との相互關係が必要である。果して、而て如何にしてこれら各々が一のものゝ構成要素たり得るか。

是を例證するものとして、而て自分が最もよく知て居り、又、最も明確に區別し得る言語の現象を撰ぶことにする。

言語には先づ第一にいつも體驗が現はれてゐる。言語は表出運動の一である。けれども凡ての言語現象を専ら體驗心理學だけから理解することは到底出來ないことである。ゾントは事實的には全く個人的體驗の心理學に立てゐる。たゞ語音が一般の表出運動からの相對的獨立を説明する場合にのみ社會的影響を採り入れてゐるに過ぎない。ダーウインの説に於ても個人から社會への必然的進出

の重要なことを看過してゐる。ところが語音の發表は必ずその認知者を豫想する。認知者と關係して始めて發表が發表たり得るのである。彼等の言語の學説が何れも不充分なのは體驗以外の方面に多く出でなかつたことに由來するのである。

即ち言語は既に體驗が外部へ現はれたものである。表出であるとするれば是を純粹に物的なものとして眺めることが出来る。音聲學は斯の如き見方を採るものである。詳言すれば音聲學は純粹に音聲だけを研究する爲に、原理上、言語の中から意味の方を看過する。又はフツセル流に言へば意味を括弧に入れてゐる。が而も一方に於て音聲學は決して言語と無關係なる音を採らない。なるべく言語に於て意味ある符號として基礎になつてゐるやうな音だけを特に選擇する。そうすることによつて始めて音聲學が音聲學であるのである。是と同様のことが行動主義に就いても言はれるであら



う。行動主義は人間や動物の凡ての運動の中から意味ある行動なりと知覚し得るものだけを即ち Sinnvollなものだけを選択することが本質的に命ぜられてゐる。心理學者の關心はこの Sinnvollな行動を除いて他にない。してみれば行動主義に於ても亦た何か括弧に入れられて残つてゐるものがある。而も意味とは何ぞやといふことについて説明を與へ得るのは結局體驗心理學以外には存在しないのである。最後に體驗心理學によつて説明を下されるまでは動物心理學の範圍内では終局の解決に達することは出来ないで唯だ豫備的の假定で止つてゐるの外はない。例へば斯くくの動物の行動は宛も本能運動が意志や理解力によつて支配されてゐるかのやうに見えるといふだけに止つてゐなければならぬ。

音聲學と行動主義とを學問論的に比較し得る第二の點がある。凡そ音聲學者は音響現象そのもの

又は其が人間の發音器官からの發生をば宛も物理學者や生理學者と同様な態度で見得る。音叉や唇管から筋肉組織の複雑な器官の構造から動物や人間の中樞神經系統に至るまでを概觀する。が而もそれら凡ての上に決して忘れることを許されないものがある。その第一は音聲學の完成は遂に吾を導いて心理學に到らしめるといふことである。その第二は音聲學は言語學に奉仕する學であるといふことである。

凡そ吾々が聞いたり見たりすることの出来ないものは言語符號となつてゐることは出来ない。そればかりではない。人間の發聲器官が発し得る多種多様な連續的の諸音聲の中で人間の言語は何れも數へ得べき極く小數の音聲だけしか使用しない。かゝる選出の元理は或は體驗心理學の一般の見地からするにせよ、或は個々の言語に於て部分的にのみ知らるゝ歴史的事情からするにせよ、何

れにせよ言語符號の意味作用を顧慮せずには到底獲られないのである。動物と人間の行動に關する學も亦た是と全く同じ状態にある。自然的又は人工的な「狀況と反應」が全體的なもの、生物學の意味を顧慮することなしに心理學の目的の規定するやうな概念規定を受け得ると思ふのは根本的の誤謬である。ある動物をある空間内に閉ぢ込めて諸種の狀況の下に觀察するといふことは既にその狀況を、ある行動を、争闘として或は飼養活動として規定することを意味する。反應をば目的論的に解釋し、科學的觀察に就いて選擇を施すことを意味するのである。實驗があらゆる種類とあらゆる程度の意味排除を企てやうとも其は必ずしも難すべきではない。が、たゞ終局に於ては、無論、意味ある行動の學説が現はれて來なければならぬのである。それが心理的なる研究たらむとする限りに於ては。

斯の如くして行動心理學は遂に體驗心理學に安住の地を求めなければならぬし、逆に體驗心理學はよく行動心理學の存立を認め得ることが言語現象に就いて知らるゝのである。が其だけではない。言語には第三に動物界に於ては今日の吾々の知れる限りでは全く見出されず唯だ人間だけに於て見出さるゝ所の機能がある。それは客觀的の對象又はある事態を表現する手段としての言語である。眞理或は正當の概念及び標準は言語の表現機能から取り來られ、逆に適切にして正當なる表現をなさんとする理想は語の選擇及び文章の構造に至るまで深く言語的生産を規定するのである。従て言語は客觀的精神の一部分である。それは認識、學問、論理學に絡み合つて成長して來た。これらのものと言語とを同一の語ロゴスを以て呼んだのはギリシヤ人であつた。ところが從來の言語の學説はこの方面を輕視してゐる。再びヴントを

繙くならば彼は文章論に於て主張文はその心的内容に於ては事實的なるもの、客觀的なるものに向てゐることを述べてゐる。が是はもつと始めに述べて言語説の原理論的基礎に加へなければならぬのである。物の名稱として用ゐられる語は凡て客觀的なるものを指してゐる。そこに敘述文の如きものが存在する可能性があり、言語に於ける特に人間的なるもの、核心が含まれてゐるのである。要するに表出符號が客觀的の對象や事態に結び付けられることにより言語に新しい意味方向が獲得されるのである。而てそれによつて交通の手段として言語の機能が無限に高まり行くのである。

さて上述の論説は形式上より見れば大前提、小前提及び斷案を具へたる三段論法である。大前提は言語の學説を樹立するには三の様相が必要であるといふことを確立する。小前提は言語の現象を心理學の對象の中へ包攝する。そこでこれから引

出される結論は心理學に屬する諸現象は三方面を要求するといふことである。

### (三) 心理學の統一

さて次に起る問題はこの出發點に於る三の分裂は遂に統一に達するであらうか。統一的な一個の學たり得るであらうか。如何にしてそれが可能であるかといふことである。體驗行動及び事業は夫々獨立的に變化し得る。が而もどうにかして一緒になり、より高い統一を構成する。若し心理學が體驗に就いてだけのまごまつた體系の學説として完成するとすれば、身心の問題も無意識の假定も將た精神分析學も存在しないであらう。ところが、どの體驗心理學者でも恐く少くとも他の一つを必要なりとするに至るであらう。また行動説だけでも心理學は完成されないといふことは「人間の本能」と題する學會講演の報告に詳説した如くである。それと同様に心理學をば唯だ主觀的精神の學

説としてだけで押通すことも諸種の破綻を伴ふのである。それだけでは體驗も又た行動も是を殘らず解説することは到底出來ないのである。其にも拘ず是を敢てせんとするものは所謂精神科學的心理學である。

スプランガーは種々の見地から心理學をば二種類に分けてゐる。(一)説明心理學と了解心理學(二)歸納心理學と洞察 *epoché* 心理學(三)要素の心理學と構造心理學、(四)意味を排除する心理學と意味を入れる心理學、(五)自然科學的心理學と精神科學的心理學の對立是である。而て將來、心理學の統一が云々されるならば必ずや其は後者に屬する心理學即ち精神科學的心理學の意味に於てなければならぬと言つてゐる。彼が自然科學的心理學として考へてゐるのは廣いフェヒネルの意味に於る精神物理學である。而てその由て來る所は數學的自然科學の世界觀である。過去の心

理學に於て物理主義が行はれたことは事實である。心理學者はフェヒネルとロツツエの物理的な考へ方だけを採用して他を顧みなかつたのである。即ちライブニツツ、ロツエ風の世界觀の半面たる宇宙論的又は內在的目的論を看過したのであつた。

そこに於ては單なる手段に過ぎなかつた普遍的力學をば絶對的世界原理としてしまつたのである。であるから古い精神物理學は意味を離れた事象の中に取殘されたのである。今日の米國の行動主義にも亦たそれと同じ運命が迫りつゝある。

斯の如き物理主義はもう心理學に於ては棄てられたのである。であるから若し今日でも自然科學的心理學といふ表現を用ふるとすればそれは心理學よりも寧ろ生物學に當たるであらう。

同一の灰色が畫面に於てある時は彼處にある時は此處に用ひられるとすると、その時々全く違つた繪畫價値を持つ。即ち或は蔭影として、或は光

から遮られた有様として、或は對象の色として、或は斑點として意味される。その繪畫の意味全體に於て表現價值、繪畫價值として夫々の意味を持つ。色彩は繪畫に於てと同様に吾々の日常生活に於ける知覺にあつても無論様々の意味を持てゐる獨り吾々の知覺に於てのみではない。動物の知覺作用に於ても意味内容が考へられる。二十日鼠の臭は猫にある行動を引き起させる。この本能運動に於て臭の知覺は一の符號の役目をなしてゐるのである。それによつて既にそれは意味の範圍の中に入れてゐるのである。最も素朴なる知覺に於てもある物又は出來事の屬性として意味が入てゐる。そこに志向的關係がある。もし之を消去する者があれば其は意味を無視するのみならず知覺そのものを無視する者である。無論吾々は音聲學者が言語に就いてなす如く意味を括弧の中へ入れることは出来る。がそうすれば吾々も早知覺を取扱へ

カールペニョラー「心理學の危機」

るのではなく感覺の材料を取扱へるのみに過ぎぬ。スプランガーの言ふ「體驗連繫客觀的世界への志向的關係」をば動物心理學から取り去るとすればも早そこに動物心理學としての研究範圍は残らないのである。斯の如き動物心理學を以てどうして自然科學的心理學と呼ぶことが出来るであらう。またその反對に精神科學的心理學は唯だ體驗の志向的契機だけに基いて止つてゐることは出来ないし又是を許されないのである。それは必然的に體驗心理學へも行動心理學へも援助を乞はなければならぬ。この點を論證する爲に著者は更に進んで精神的接觸と接觸の理解、構述の洞察、心理學に於ける意味概念、スプランガーの意味連繫說等の數節に互つて精神科學的心理學をば縱横に解剖し批判してゐる。

以上の蕪雜にして且つ不備なる紹介によつても凡そ窺はるゝ如くこの書の優れたる點は最近の心

理學界に於て其處此處から陸續と現はれ出た全く見地を異にする而て心理學の名を獨占せむとする諸主潮に對して心理學そのもの、原理を反省することによつて夫々批判的考察を施し因て以て各々が心理學全體の中に於て占むる位置乃至意味を明かにしたことである。この所謂哲學的考察によつて新傾向の相互關係が明瞭にさるゝと共に心理學の根本問題即ちその對象及び方法の問題に更に一層深き注意が向けられたのである。併し乍ら本書は元來諸種の新心理學に對する批評を以て主要なる任務とするものであるから原理論そのものに就いては組織的な叙述が試みられてゐないのは望蜀の沙汰とは言へ些か遺憾である。近く出版さるゝと聞く言語の學說に従て著者が此の書に於て驅使した心理學の原理に立脚した斯學の組織的體系を發表されむとことを望むのは獨り本紹介の筆者のみではないであらう。

因に言ふ。ベルリン派の形態心理學に就いては

本書に於ては深く觸れられてゐない。其に就いて著者は序文にも述べてゐるやうに、形態思想が心理學にとつて重要な意味を持つことは著者の形態知覺に關する著述に見るも明かである。彼の批評は第一に形態の概念が心理學の問題そのもの、範圍内に於ても餘りに擴張され過ぎてゐることに對してある。彼はこの概念が知覺の問題以外に於ては例へば思考作用の方面に於てだけ適用され得るかを大に疑てゐる。第二は形態の概念を物理學の領域にまで持て行かうとするに對して抗論する。これらのことに關しては *Zeitschrift für Psychologie* に掲げられたコフカの「新心理學」に對する論評に詳かである。

## 彙報

### 哲學茶話會

四月二十八日(土)午後七時樂友會館に於て  
コーヘンの根源と非有……………由良哲次君

### 哲學茶話會

五月十二日(土)午後七時、樂友會館に於て  
ウイリアムシュエームスの認識論と形而上學……………高阪正顯君